

宮島の風習

厳島は信仰上の理由から、独特の風習を多くもっている。

時代とともに薄れたものや行われなくなったものも多いが、今も受け継がれているものもある。中央政権から離れた島の習俗であるために文献として記録されることは少なかったが、戦国時代に陶氏（すえし）・毛利氏の御師（おし/ 特定の寺社に所属して、その社寺へ参詣者を案内し、参拝・宿泊などの世話をする者のこと）として精神面を支え、大内氏から「社奉行」に任じられた厳島神主家の棚守房頭が記した「棚守房頭覚書」（1580年(天正8年)）には、膨大な業務文書を司る立場ならではの生々しい記録が残っていて価値が高い（「棚守房頭覚書」は、説明を付して1975年に宮島町から出版されている）。

ケガレの忌避

島全体が神域（御神体）とされたため、血や死といったケガレの忌避は顕著であった。

- 島に死人が出ると、即座に対岸の赤崎(現在の宮島口)の地に渡して葬る（房頭覚書）。赤崎は現在の JR 宮島口駅のやや西にあり、遺族は喪が明けるまで島に戻ることができなかった。「～の向こう」と言うと「あの世」を連想するため、「～の前」と言い換えていた。この風習は第二次世界大戦頃までは続いていた。
- 島には「墓地も墓」も築いてはならない。現在でも 1 基もない。（島内関係の大方は宮島口の延命寺が多い。
- 島の女性に出産が近づくと、対岸に渡って出産後、100 日を経て島に戻るしきたりであった。「婦人、児を産まば、即時に、子母とも舟に乗せて、地の方に渡す。血忌、百日終わりて後、島に帰る。血の忌まれ甚だしき故なり。」（房頭覚書）
厳島神社の外宮を地御前神社（廿日市市地御前）というように、「地の方」とは対岸の本州を指す。
- 女性は生理の時期には、町衆が設けた小屋に隔離されて過ごした。
『あせ山』とて東町・西町の上の山にあり。各々茅屋数戸を設けたり。「あせ山」は血山なるべし。島内婦人月経の時、その間己が家を出て此処に避け居たりし。」（房頭覚書）

耕作・機織りの禁止

鉄の農具を土に立てることを忌み、耕作は禁じられた。また、「女神の御神体内」であることから、古来より女性の仕事の象徴とされた機織りや布さらしも禁忌とされていた（[山の神](#)を参照）。

「絶えて五穀を作らず、布織り布さらす事を禁ず」（房頭覚書）。

特に耕作が禁じられていることはよく知られ、島に生活する人のために対岸から行商人が船を出す光景は第二次世界大戦後まで続いた。廿日市（二十日の市）は鎌倉時代、厳島のために立った市場から発展した町である。

シカ・サルとの共生

厳島のシカは太古から生息していたと見られるが、歴史時代に入ると奈良の春日大社にある神鹿（しんろく）思想の影響も受けつつ、神の使いとして大切に扱われた。シカが家に入らないよう

に「鹿戸」を立て、家々で出た残飯は「鹿桶」に入れて与えた。房顕覚書によると、シカを害するのを避けるため、島内では犬を飼わず、外から犬が入り込むと島民が捕まえて対岸に放したという。サルが家に入り込んで食べ物を盗っていても、捕まえて罰することはなかった。

宮島の鹿

鹿は牛と同じく反芻（はんすう）動物であり、草食動物である。

シカの胃袋は4つある。

第一の胃袋には数百億の微生物がおり、この餌として「草」を食べる。

第二の胃袋では微生物は食物繊維を「有機酸」に変えます、これが鹿のエネルギー源に為ります。

第三の胃袋の中では、酸化した微生物は住み難くなる、鹿は牛のように反芻して胃の中を中和する（唾液はアルカリ性の為、胃の中を中和する）と更に分解を進める、同時に有機酸は微生物の栄養にもなり爆発的に微生物が増える、鹿の食べ物の8割は微生物となる。

第四の胃袋で微生物を動物性たんぱく質（つまり肉）にそして消化する。

この様にして鹿は「草」のみを食べて生きていける。

明治12年(1879年)12月に鹿保護の為全島禁猟となった。

平成8年世界文化遺産に登録されるまでは、宮島島内でも「鹿の餌」を土産物店で販売していたが、現在は販売禁止となっている。

盗賊

盗賊を捕えれば、偽鬢偽眉（かたびんかたまゆ）を剃って地の方（じのかた）に渡す。

宮島の遊郭

寛永2年(1625)広島藩は城下中島材木町にあった娼家を厳島に移し、同時に娼家・芝居・見世物などを城下から一掃する風俗統制を行なって以来、藩公認の遊所としてますます栄えた宮島。ところが明治時代になって、広島県は風俗に厳しい取締を行い宮島の遊郭は消滅。

宮島にいた芸妓や娼婦は江波島（今は広島市中区江波・・・当時は島）という島に送られた。

江波は、かつて広島湾に浮かぶ「江波島」という島であった。江波の村社である「衣羽（えば）神社」には約680年前の記録があり、島には約700年前には人が住んでいたという記録が残ってデルタはほぼ海中であり、現いる。広島が五箇庄ごかのしょうといわれていた寒村の頃、現在の太田川在丘の部分デルタに点在していた島々であった。

江波が島であった頃、広島湾は洪水が発生した際に流出した土砂が、広島湾に溜まって自然の力によって海岸線が南下していった。約400年前毛利輝元によって広島城が築かれると、人の力によって急速に干拓が進んでいった。

明治時代には舟入と陸続きになった。現在の地形になったのは戦後の埋め立てによるものである。

宮島の弥山（みせん）登山道15丁目付近に180メートルくらいの石畳がある。

この辺りは湿気が多く、樅（もみ）や栂（つが）の常緑針葉樹が群生して着物姿では歩きに合ったようで、当時の遊女たちがお金を出し合って作ったと言われている。

潮汲み

町の商家や民家では、鳥居のある浜で海水を汲み、門前を清める「潮汲み」という習慣がある。
元旦に行うものを「新潮迎（わかしおむかえ）」という。
戦後は数人が行うのみにまで減っていたが近年見直され、行う家や店が増えつつある。